

戦争が遺したもの

鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二著

戦後思想界を代表する知識人の鶴見俊輔氏に、上野千鶴子氏と小熊英二氏が「戦争」を軸に話を聞いた3日間の記録。鶴見氏に敬愛の心を持つふたりは、ときに鋭くときにやさしく質問を繰り返し、物語を読むように戦中戦後史の中にすんなり入っていける。

終戦の日、鶴見氏には「自分の命が助かった」と安心感を覚えながらも、「こんなことで助かってしまった」と恥じ入る感じもあった、という。そして、理論的な鶴見氏が答えをひとつに絞りかねる個所があり、そのゆれ動きや葛藤(かっとう)にこそ、リ

アリティーが感じられる。

しかし、鶴見氏がふたりの意見に断固として「ノー」を言う個所もある。たとえば上野氏が、小林秀雄の「自分は生活者として、個人の運命を国家の運命と共にする」との発言について問

自ら行動しようとしめない日本の知識人への批判の目は厳しいが、戦後、「思想の科学」を創刊し、ベ平連をはじめとする市民運動にも積極的にかかわってきた鶴見氏の活動の源泉は、まさに「知識人としての責任を取

ようなのだ。鶴見氏は言う。「私の『俺は悪人だ』というのは、おふくろから入っちゃっているんだ」。そう、この本はまた、母親との関係に端を発する、ある男性の心の葛藤の歴史として読むこともできるのだ。

個人と社会。家族と他人。そして時代。ひとりの人間を語る上でも歴史を論じる上でも、これらの要素のどれひとつとして外すことはできないことをあらためて感じるとともに、「それにしても、『戦後世代』の中にはたして『知識人』はいるのだろうか」と暗たんたる気持ちに陥った。(香山リカ・精神科医)

「知識人」としての責任感

うと、鶴見氏は「私は、そういうことを言うインテリは許せない。知識人は既に特権を得る道を昇ってきている」と、知識人が取るべき責任を強調する。

「学校エリート」にとどまり、

りたい」というその一点にあると言ってもよいかもしれない。

ところが興味深いことには、その罪悪感に近いほどの責任感とは、「戦争」より先に厳格な「母親」によって基本が形成された



新曜社 2,940円